

「えっ、この中に裸足で入るんですか？」私は驚いて、思わず二度聞き直した。水田の中を覗いてみると、そこにはアメンボ、ミミズ、名前も知らない緑色をした虫がいる。大の虫嫌いの私は、大声をあげて今すぐ逃げ出したくなった。しかし、大きく深呼吸をした後、覚悟を決めた。目を閉じ、そっと土の中に右足を入れた。私の初めての田植え体験は、こうして始まった。

私の通う中学校では、授業の一環として農家民泊を取り入れている。今回私が農家民泊に行ったえびの市は、宮崎県の西部に位置し、宮崎市内から車で一時間ぐらいのところにある。周囲を九州山地と霧島連山に囲まれており、寒暖の差が大きい盆地気候で、肥えた土壌と豊富な湧き水に恵まれ、美味しいお米がとれるところとして有名だ。

えびのに到着すると、サーッと清々しい風が吹き抜けた。目の前には、のどかな田園風景が広がっていた。水の張られた田んぼは、太陽の光を受けてキラキラと輝き、整然と並べて植えられた早緑色の苗が、かすかに風に揺れていた。一目見て、えびの市が「うまいコメどころ」と呼ばれる訳がわかったような気がした。

私はご飯が大好きだ。炊飯器の蓋を開けると、ふわっと香り立つ湯気の向こうに、ふっくらと炊き上がったツヤツヤのご飯。口に含んだ瞬間広がる程よい甘さ。少し硬めが好きな、好みのもちもちした菌ごたえ。美味しいご飯を食べる度に、「日本に生まれて良かったなあ」としみじみ思う。しかし、その大好きなお米が、どのように作られているのか知っているかという、今一つピンとこない。苗を育て、田植えをして、稲刈りをして、その過程をなんとなく想像できるくらいだ。ご飯が好きだと言いながらも、実は米について何も知らなかったのだ。

水田に足を踏み入れると、足がズブズブズブツツと、一気に膝下まで泥に埋まった。泥の中は、思ったよりひんやりしていて気持ち良かった。農家のおじさんから苗の植え方を教えてもらおうと、早速植え始めた。ところが、苗を植え、移動しようとするが動けない。一步また一步と踏み出そうとしたが、足が泥から抜けられない。悪戦苦闘を繰り返しながら、なんとか終わることができた。終わったときには、服や顔までもが泥だらけになっていた。「田植えってこんなに大変なんですね。」と私が言うと、「あはは、こんなの序の口だよ。でも最近では機械で植えることが多いけどね。田んぼは、植えておしまいじゃないからねえ。まだまだやらないといけないことが、いっぱいあるんだよ。」と、おばさんは笑いながら言った。

米づくりは、種選びから始まり、苗を育て土を作り、田植えをして、稲を育て、収穫をする。その間、毎日稲の様子を見に行き、水の量を調整したり、肥料を与えたりと、稲の状態に合わせて必要な作業をするそうだ。自然相手の米づくりは、天候不良や害虫など、予想外のことがたくさん起こる。しかし、農家の方々は、これまでの経験や知識で、それを乗り越えながらお米を作ってきた。毎日私が食べているお米が、農家の方の努力の賜物であったことを、身をもって感じた。

現在、農家の高齢化や後継者不足、米ばなれなど、米づくりは多くの問題を抱えている。私がお世話になった農家でも、跡を継ぐ人がいないと聞いた。このままでは、日本の米づくりは途絶えてしまう。私たちは、もっとお米に関心を持ち、日本の米づくりを守る取り組みを、早急に始めなければならぬ。そして美味しいお米だけでなく、日本の食や文化、この美しい田園風景を後世に伝えたいと強く思う。初めての田植えは、私に多くのことを気づかせてくれた貴重な体験となった。